

日本における Onésime-Édouard SÉGUIN

学習院大学（日本） 川口幸宏



皆様、こんにちは。

東洋の東端の国日本からやって参りました川口幸宏です。日本の首都・東京にある学習院大学で中等学校教員の養成を担当しております。学問の専門領域は教育学です。セガン生誕 200 周年記念事業であるシンポジウムに参加し、報告できることを幸せに思っております。

1. まえがき

ところで、現在の日本には、唯一のセガン研究の専門団体「日本セガン研究会」(la Société Japonaise des Recherches sur SÉGUIN)があります。同研究会は本年 1 月 20 日に、すなわちセガンが 200 年前この世に生まれ出た 2012 年 1 月 20 日に、「セガン生誕 200 周年記念号」と題して『セガン研究報』の通巻第 8 号を刊行しました。(1)アメリカ時代のセガン研究の課題 (村山拓、帝京平成大学講師)、(2)モンテッソーリーセガン教具に関する比較研究(竹田康子、大阪大学大学院)、(3)Onésime-Édouard SÉGUIN の半生に関わる実証的研究 (川口幸宏、学習院大学教授)、その他を内容としており、日本におけるセガン研究の新しい到達が示されております。

2. セガン研究と知的障害教育実践の開拓

我が日本において、特殊教育研究とりわけ知的障害教育研究あるいはその実践に携わる人々の間ではセガンの名とその業績は避けて通ることができない重要な位置づけがなされてきております。19 世紀の終わり頃から今日に至るまで、特殊教育研究者・実践家等によって、セガンに関連する著作物が数多く公表されおります。それだけではなく、特殊教育における専門的基礎教養にも位置づけられ、教育全般に関わる人物辞典にも紹介されております。

以下、日本の 100 余年間に見られるセガン研究の特徴を 3 期に分けて紹介いたします。

第 I 期 セガン研究の開拓と知的障害教育実践施設の創設

まず、キリスト教日本人伝道者内村鑑三 (1861~1939)がアメリカ合衆国カリフォルニア州での 1884 年~1885 年の体験をもとに発表した論稿において、欧米の知的障害教育論をセガンの名とともに日本に紹介したのが第一歩であります。さらに、櫻井鷗村 (1872~1929) がセガンを「白痴教育の開祖」と位置づけ略伝を綴っております。

続いて、「日本の知的障害教育・福祉の父」と称される石井亮一（1867～1937）、その夫人で「日本の知的障害教育・福祉の母」と称される石井筆子（1861～1944）の諸活動、ならびに、1891年に石井夫妻によって設立され今日も運営がなされている社団法人・滝乃川学園の福祉・教育が、セガンの理論と実践に強い影響を受けた活動を紹介しなければなりません。とりわけ石井亮一の業績を簡略に紹介いたします。

石井の知的障害とその教育・福祉に関わる研究は、彼の死後の1940年にまとめられた『石井亮一全集』（全4巻）でその真髄を見ることができますが、石井は、セガンの業績を高く評価し、セガンの実践はヨーロッパ各地の知的障害教育を起こさせる引き金となり、セガンの1846年著書『白痴の精神療法、衛生、教育』（*Traitement moral, hygiène et éducation des idiots et des autres enfants arriérés au retardés dans développement, agités de mouvements involontaires, débiles, muets non-sourds, begues etc.*. Chez J. B. Baillièrre, Paris, 1846.）を「白痴教育の宝典」として尊重しました。石井は、セガンの学説を体系的に説明し継承する必要がある、と強調しております。

石井は、1896年にアメリカ合衆国を訪問した際、ペンシルヴァニア州の知的障害の子どものための生理学学校を訪問。エルジー・ミード・セガン夫人と面談をしております。石井はセガン教具をセガン夫人から譲り受け、日本に持ち帰り、滝乃川学園での実践に適用しました。日本で初めてセガン方式が導入されたのであります。

関連して申し上げたいのは、残念ながらセガン教具は、学園が火災に見舞われた際に、家屋と共に消失してしまったということです。セガン教具は復元されることなく今日に至っております。このようなこともあるのでしょうか、近年、セガン教具に対する研究的関心が強められてきております。ちなみに川口幸宏は2009年にパリ医学史博物館を訪問し、ブルヌヴィル・コーナーに常設展示されている教具類を撮影し、日本の関係者等に写真提供をしました。

話を戻します。先に紹介した石井亮一よりやや遅れて訪米し（1916～1918）、知的障害教育・福祉の理論と実践に学ぶことによって治療教育学を確立し、また1919年に学校法人藤倉学園を創設した川田貞治郎の名と業績も忘れることができません。

こうした先駆的な研究と実践とが、日本において、エドゥアール・セガンの名と業績を広げ、知的障害教育と福祉の発展に貢献しているのです。

第II期 セガン研究の本格化～1960年代以降

石井夫妻等の先駆的な業績は、それ自身が苦難に満ちた足跡であるけれども、日本における知的障害教育と福祉の法的・行政的整備拡充の運動展開に貢献することになりますが、それは同時に、日本における特殊教育研究の本格的展開の呼び水ともなりました。埼玉大学、東京学芸大学、奈良教育大学、筑波大学はじめ多くの大学の特殊教育研究に関わる講座を開く教授、彼らが運営するゼミナール・研究会によって、セガン研究が進められました。それらは、日本における前近代後期以降の障害者福祉の思想や実践の調査・発掘、欧米諸国の特殊教育・障害者福祉に関わる研究・実践の翻訳紹介という大きなうねりとして現れました。それらは、日本教育学会や日本特殊教育学会といった我が国の学的最高権威の舞台に、研究成果として持ち込まれました。1968年10月に開催された日本教育学会第27回大会で行った清水寛、津曲祐二、松矢勝宏の共同発表「セガン研究（一）」が先駆けとなっております。その時の論題は、セガン研究の現代的意義（清水寛）、セガンの生涯と業績（津曲祐二）、セガンの思想及び教育観の背景（松矢勝宏）であっ

たことを付け加えておきます。

こうした流れの中で、*Idiocy: and its treatment by the physiological method*. William Wood & Co, New York, 1866.が1963年に邦訳出版されて以降今日に至るまで、セガンの著作のほぼすべての邦訳出版が進められております。また、M. タルボット (アメリカ合衆国) の博士論文、すなわち、ÉDOUARD SEGUIN: *A Study of AN EDUCATIONAL APPROACH TO THE TREATMENT OF MENTAL DEFECTIVE CHILDREN*, 1963. や、1980年にクラムシーで開催されたセガン没後100周年記念行事などを媒介として、我が日本におけるセガン研究の本格化が加速されました。とりわけ、1981年、日本特殊教育学会第17回大会ではセガン没後100周年を記念してシンポジウム「セガン—その思想と実践」が行われました。この時の論題は、(1)セガンの「白痴教育論」から学ぶこと(松矢): (2)初期セガンの「白痴」教育観の検討(温田): (3)セガンの「生理学的教育」と教育事例(清水)、であります。

これらの動向を集大成したのが清水寛編集の『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学における教育実践 (同著に添えられた原著仏文タイトルは *Séguin—l'origine de l'éducation et du bien-être pour les handicaps mentaux la recherché, et l'éducation au sein de l'Université de Saitama 1972-81*)』(全4巻、東京、日本図書センター、2004年。)であります。同書の執筆者が60数名という数字を見ても、この期の日本におけるセガン研究に向かう熱意を伺うことができます。日本社会事業史学会は、2005年に、清水寛と同書に対して「文献資料賞」を授賞しております。なお同書はクラムシーに寄贈されております。また、Bernard BARDIN 前クラムシー市長が PREFACE を寄稿しておられます。

この第II期のセガン研究を推進した者としては、教育学者、心理学者、特殊教育学者たちの名を挙げることができます。前記の清水、松矢、津曲の他、中野善達、中村満紀男、星野常夫等の名前は特筆されるべきであります。ただ、それらの多くは欧米でのセガン研究の援用であり、オリジナルな史料発掘とそれに基づく史料評価はほとんど見ることはできません。史実誤認や史料誤訳が定説化されているという状況も見られます。その意味では、セガン研究が我が日本で活発に行われたけれども、それらの到達は不十分であったと言わざるを得ません。

典型的な例を挙げますれば、これはセガンが「白痴教育」を展開した場に関わったことなのですが、セガンはラ・サルペトリエール救済院 *l'hospice de la Salpêtrière* とビセートル救済院 *l'hospice Bicêtre* とで「白痴教育」を行ったというのが我が国での定説とされてきました。そして今でもそのように主張する有力なセガン研究者がおります。この定説の源となっておりますのは、先に挙げた M. タルボットの博士論文であります。しかしながら、セガンが「白痴教育」を開拓し実践した場は、セガン自身が1846年著書で語っているところから従えば、「白痴の教育の最初の取り組みは、エスキロールの指導の下でイタールの下絵を元に作り上げ、続いて、パリ、ピガール通りのつましい施設で、ただ一人で生徒達と実践をした。さらに、不治者救済院の内奥のことなど知らなかったが、ある励ましを得て道を拓くに至った。云々」(pp.323-324 <要旨>) (原文: *Soit que l'on considère ses premiers efforts, cette remise à la fonte des ébauches d'Itard sous la direction d'Esquirol, soit que l'on se reporte aux pratiques de l'auteur privé d'appui, travaillant seul avec ses élèves dans son modeste établissement de la rue Pigale; soit qu'on le voie poussé par une main dont il ignorait le secret à l'hospice des Incurables, où un rapport décisif constata les progress qu'il avait, ...*) とあります。

この記述の後にビセートル救済院での不遇な状況が綴られておりますから、タルボットはセガンが記述する不治者救済院 *l'hospice des Incurables* を「ラ・サルペトリエール救済院」だと特定したのでしょうか。我が日本のセガン研究はこれに忠実に従ってきたのであります。しかしながら、この時代、*l'hospice des Incurables* は、パリに男女それぞれ用の2施設ありました。つまり、男子施設は右岸の *rue de faubourg Saint-Martin* に、女子施設は左岸の *rue de Sevrès* にありました。セガンは、1842年に出した『遅れた子どもと白痴の教育の理論と実践 不治者救済院の白痴の子どもへの訓練 *Théorie et pratique de l'éducation des enfants arriérés et idiots Leçons aux jeunes idiots de l'hospice des Incurables*』の p.48 において、「男女の不治者救済院に呼ばれたけれども、私は男子の方でしか実践をしなかった。」旨を書いておりますから、*rue de Sevrès* の女子不治者救済院で実践をしたのではないことは確かであります。事実、彼が教えた男子のみの青少年10人の記録が残されているのですから。付け加えて申しますと、セガンをフランス社会に「復権」させたブルヌヴィルもセガンが *rue de Sevrès* の不治者救済院で実践をしたと述べておりますので、実践の場の認識の混乱の源はブルヌヴィルの報告にあるのかもしれませんが。今次シンポジウムのパンフレットのセガン紹介記事も同じ誤りをしております。

第III期 セガン研究の新たな展開～21世紀に入って

21世紀に入って、日本におけるセガン研究の新しい展開を見るようになります。その端緒を切り開いたのが、藤井力夫（元北海道教育大学教授）の研究と福祉施設創設であります。

藤井は心理学研究の立場からセガンの「生理学的教育」とりわけその実践と理論の成立過程に着目し、渡仏し、フィールドワークと関係史料の発掘ならびに分析的研究を繰り返し、その成果を日本特殊教育学会や北海道教育大学の各紀要に発表しております。その精緻な研究によって、セガンの「白痴教育」論の構造、ならびにその成立過程が明確にされ、それと同時に、現代の知的障害教育・福祉に直接応用できることを理解しました。彼は、大学教授の職をなげうって、福祉施設を運営し、セガン方式に基づく知的障害教育と福祉の実践に力を注いでおります。私は彼のことを「現代日本のセガン」と呼び、尊敬しております。

あと一つは、私、川口幸宏によるセガン研究であります。私は特殊教育研究ではなく近代初等教育史研究をプロパーとしております。フランスを対象とした研究では「フレネ教育」や「パリ・コミューン *La Commune de Paris 1871* の初等教育制度改革」に関する研究があります。これらに貫いている研究方法がセガン研究にも導入され、徹底したフィールドワーク・史資料発掘とその評価による実証主義に貫かれているのが特徴です。

私は、セガンの前半生の人生行路を訪ね歩きました。生誕の地 *Clamecy*、父祖の地 *Coulanges-sur-Yonne*、母の出生地でありセガンが幼少年期を過ごした *Auxerre*、社会活動や「白痴教育」開発の場 *Paris* に脚を運び、それぞれの地のセガンが定めた住居地、学んだ学園、働いた場所を訪問しました。もともと、当時を偲ぶよすがなど、ほとんどないではありませんでしたが。

私のセガン研究は、セガンの「白痴教育」実践・論の成立過程を彼の主体形成の側面からとらえ直そうとするものであり、日本におけるセガン研究の中では、独自のなものであります。その成果は、『知的障害<イディオ>教育の開拓者セガンー孤立から社会化への探究』（東京、新日本出版社。2010）や『セガン研究のための葉』（2010）、「旅路—*Onézime-Édouard SÉGUIN* その生誕からフランスを去るまでの光景」

(2012)などにまとめられております。また、私はそれらの著作において、セガンの初期著作の幾編かの邦訳を試みております。

私のセガン研究が日本のセガン研究に対して新たに提供したことは、1. 1848年の2月革命の頃まで(渡米まで)のセガンの半生をセガン自身の叙述に丹念に従いながら解きほぐしたこと、2. その際、可能な限り、クラムシー・コミューン、クーランジュ・コミューン、オーセール・コミューンの各戸籍係及びオーセール県立古文書館、パリ国立古文書館、AP/HP 古文書館で閲覧可能な公文書等の史資料で検証したこと、3. 2月革命とセガンとの関わりを示す史料発掘に努めたこと—例えば、フランス国立図書館に蔵されている「Club des droits du travailleur」の見出しの元でなされた'Appel aux Travailleurs.'という集会呼びかけポスターは、これまでのどのような研究書、資料集でも見ることはできません—であります。

私のセガン研究に関する著作に対しては、『フランス教育学会紀要』第23号(2011年)で「言葉をもたない『イディオ』と呼ばれる子どもたちが、どのようにして内面を『表現』できるまでに、導くことができたのか。セガンという一青年教師の歩み、その必然性を明確にさせないではおけない—生活綴方研究者のすごさを感じる」(藤井力夫による書評より)との高い評価が与えられました。

3. おわりに

我が日本におけるセガン研究の歩みは、排除・阻害され続けてきた「イディオ」を社会に解放し共生者としての権利を持つ人々としての正当な位置に据えるための熾烈な戦いと実践可能な方法の開拓の創意工夫があったことを、明らかにしております。つまり、エドゥアール・セガンの「遺産」は、我が日本の教育・福祉の制度・実践改革に大きな寄与をしているということができます。それにとどまらず、私によって明らかにされたことは、セガンは、社会の不平等と管理統制とに対する強い疑問から導かれた具体的行動—1830年革命・1848年革命への参加—直接にせよ周辺であったにせよ—、サン・シモン主義者としての政治、社会、芸術などの諸活動—を起こしている、ことでもあります。彼の「白痴教育」開拓はそれらの活動の総集約であったということができますが、私はそれらの諸活動を可能な限り史資料的に明らかにしております。

セガンのフランス時代の実像—必ずしも全容ではありませんが—が我が日本で初めて明らかにされたという点で、清水寛によって、川口の研究は今後のセガン研究の礎石を置いたと評されております。

謝辞 MM. Yves PELICIER et Gui THUILLIER によるセガン研究(著書再版を含む)は、今日の日本におけるセガン研究の灯台としてすばらしい導きをしてくださっていることに、謝意を表すものであります。また、クラムシー学芸協会は私のセガン研究に力をお貸し下さったばかりか、セガン生誕200周年記念という輝かしい冠を持つシンポジウムでの報告の機会を与えて下さいました。最後に、2003年以来今日にいたるまで、私のセガン研究に伴走し大きな助力を下さったパリ第5大学大学院博士課程在学中の瓦林亜希子さんに対して、心から御礼申し上げます。

結びに、クラムシーでのこのシンポジウムが、日本における、フランスにおける、そして世界におけるセガン研究のさらなる発展に寄与されんことを願ってやみません。

ご静聴、ありがとうございました。

追記

1. 報告と討議で1時間余。適切な通訳によって会場との質疑応答もスムーズに行われた。質問は、パリ・コミュニケーションをどう評価するか、普通児教育にセガン方式がどれほど根付いているか、という内容であった。いずれも本報告に直接かかわることがないので、質問者のお考えを承っておく、という態度を通した。感想では「このシンポジウムでの最高の報告でした。言葉の壁という不自由さがあるでしょうけれど、それを克服し、我々フランス人でさえ成し遂げることが出来ていないセガンの実像に迫っていることに、強く敬意を表します。熱意、努力、教養の広さ・深さ、すべてにおいて頭が下がります。ありがとう。」との声が出され、また、何人かがトレビアンと声をかけてくださった。最後に、「クラムシーのセガンが、あなたのおかげで、世界のセガンになった。心からお礼を申し上げます。」学芸協会長の挨拶をいただき、会場から大きな拍手もいただいた。生まれて初めてスタンディングオベーションをいただく光栄に浴した。

2. 報告者川口幸宏のセガン研究の歩みは次のようになる。

○2003年春、清水寛氏のご依頼によりフランス時代のセガンに関わる資料の探索を開始した。同時に、フランス革命以降第2共和制期までのフランス医療・福祉制度改革・整備について調査・学習を進めた。そのことによって、セガンが男子青少年に教育実践を施した施設は、我が国の研究史で常識とされてきた「サルペトリエール院」ではないことに気づき、実際の施設がセヌ川右岸フォブール・サン＝マルタン通り男子不治者救済院であると確定した。

○2004年11月、セガンの少年期の学習歴調査のためにオーセールに入り、ヨンヌ県立古文書館にて当該史料の発見。また、医学史博物館に「セガン教具」が展示されていることを知る。同時に、セガンに関する業績で、我が国の研究ではかなり重大な職責を担っていたかのように語られてきたが（例えば「サルペトリエール院の改革」）、それはあり得ないことだと判断した。また、パリ国立古文書館にてセガンの法学部、医学部学籍等調査。法学部は未修了、医学部は1843年度学籍登録のみ、就学軌跡見当たらず。

○2005年2月-3月、セガンの生育歴調査のためにクラムシーに入り、クラムシー学芸協会より何点かの公文書の提供を受ける。また、同年8月、旧病弱児施療院(ネッカー子ども病院)調査開始。その際、旧女子不治者救済院救(ド・セブル通り不治者救済院)が廃墟ではあるけれども建築物が残っていることの示唆をいただく。さらに、セガンが最初に「白痴教育」を手がけたアドレアン少年は、中野善達が言うような「病弱児施療院の収容児童」ではないことを入退院・死亡者名簿から確定した。

○2009年5月-6月、クラムシー、クーランジュ・シュール・ヨンヌ、オーセール各コミュニケーション戸籍係にてセガン家、父方母方家系調査開始。AP/HP古文書館でセガンの「白痴教育」開拓史にかかわる公文書を検索し、セガンの大きな熱意と努力の跡を見いだした。秋、フランス国立図書館にて1843年革命期の「労働者の権利クラブ」集会参加呼びかけポスター発見。この発見が拙著(下記)刊行へと背中を押した。

○2010年3月、著書『知的障害<イディオ>教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究』(新日本出版社)刊行

○2011年8月、セガンフランス時代の再調査のため、クラムシー、オーセール、パリをフィールドワーク。

○2012年8月 「セガン研究の足跡を辿る旅」実施(参加者8名)。

○2012年10月28日、セガン生誕200周年記念シンポジウムで報告。